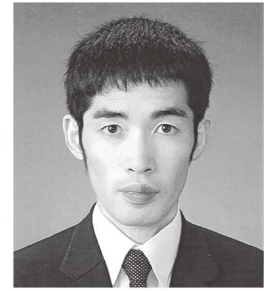


中小企業診断士の視点

第34回

RPAを活用するためのヒント



中小企業診断士 小林 健了
一社)埼玉県中小企業診断協会

近年、日本の生産労働人口が減少局面にある中、生産性の維持・向上のために「働き方改革」への対応が求められています。「働き方改革」への対応としてITの活用を検討する企業も増えています。そのような中、注目されつつあるのがRPA（Robotic Process Automation／ロボティック・プロセス・オートメーション）です。

RPAとは、人間が行ってきた定型的なデータ入力などのパソコン操作を、ソフトウェアにより自動化することをいいます。例として、「日々の伝票データや会計データを人間が表計算ソフトで入力する」、「営業部門が取引先からの発注データを収集して一覧を作成し、受注データとして製造部門や経理部門に提供する」といったケースで活用されます。つまり、RPAの導入により、データの入力・収集・提供といった単純作業の正確化や効率化を期待することができるのです。

このように今後のメリットを見込めるRPAですが、組織に単にシステムを導入しただけでは十分な効果が得られません。組織内の業務プロセスの明確化とコミュニケーションの活性化により、RPAの導入を円滑に進めやすくなります。本稿では、RPAの導入を円滑に進めるためのヒントを提示します。

最初に、RPAを導入しようとしている業務の進め方を確認し、業務プロセスを明確化します。会計データの入力であれば、誰から売上や発注といった入力の元となる情報を入手するか、誰がどのようにして入力しているか、入力したデータを誰に提供するのか、といったことをわかりやすく整理します。

次に、使用する帳票やデータ項目を明確化します。売上傳票、仕入伝票など、既存の様式が存在する場合は帳票の明確化は容易ですが、メールで指示する場合など、その業務が属人化していて特定の担当者しか知りえない場合もあるので、実際に授受されているデータ項目を確認し、整理することが必要です。

しかし、こうした業務プロセスや帳票は、部門や担当者ごとに異なることも考えられます。そこで、複数の部門や担当者にまたがってもRPAを適用できるよう、共通化が必要となります。そのためには、部門間、担当者間の協力体制を確立しておくことが重要となりますので、平素から、部門間、担当者間でのコミュニケーション機会を創出することが大事なのです。

中小企業診断士は、単に中小企業にITを導入するだけでなく、導入前の業務改善の提案、組織の活性化、導入後のIT活用の促進などにも対応することが可能です。今後、中小企業にもRPAを導入する機会が増えると予想されます。いつでもRPAを導入できるよう、今から業務や組織の整備を検討されてはいかがでしょうか。

【問い合わせ先】

埼玉県中小企業診断協会

ホームページ：<http://sai-smeca.com/>

電話：048-762-3350

Eメール：rmcsai@nifty.com